

水野治太郎 著

『「経国済民」の学』

日本のモラルサイエンス研究ノート』

（麗澤大学出版会、二〇〇八年）

川久保 剛

水野治太郎氏（「生と死を考える会・全国協議会」副会長、麗澤大学名誉教授／人間学・社会思想史専攻）の関心はつねに、廣池千九郎の可能性の中心に向けられてきたということが出来る。廣池は、明治後期から昭和前期にかけて学者（法学・歴史学など）、教育者、社会活動家として多面的に活躍した人物であるが、その仕事の中心は「道德科学（モラロジー）」と名づけられた独自の総合人間学の開拓にある。その教えは現在、（財）モラロジー研究所と（学）廣池学園（麗澤幼稚園・中学・高校・大学）を中心に継承されている。水野氏は、その「道德科学（モラロジー）」の学問的發展と現代的展開に尽瘁してきた研究者の一人である。

その水野氏の探究の成果は、これまで数多くの著作に結実し、つねに「道德科学（モラロジー）」研究の最前線を切り開いてきた。そのどれもが、時代の課題や社会の要請、そして学知の進展に目を配りながら、「道德科学」の可能性に迫る意欲作である。

水野氏の学問方法の特色は、「他者」との「対話」にある。換言すれば、「ディアロゴス（対話による知の形成）」である。そして水野氏がこれまで「対話」を試みてきた「他者」はいくつかのグループに分けることができる。第一に、総合人間学「道德科学（モラロジー）」に人生の指針と社会の展望を求める「モラロジアン」。第二に、麗澤大学をはじめとするいくつかの大学（東京女子医科大学・上智大学など）の学生たち。第三に、「生と死を考える会」や「死別の痛みの分かち合いの会」において活動をともにしてきた方々。第四に、水野氏が委員・アドバイザーとして関わってきた行政並びに民間の医療・福祉関係者の方々。水野氏の一連の著作は、これら多くの人々との息の長い、全人的な「対話」の果実であるといえる。

ここで紹介する『「経国済民」の学』日本のモラルサイエンス研究ノート』（麗澤大学出版会、二〇〇八年）はその水野氏の最新の研究成果である。水野氏はこの著作を自ら、「廣池千九郎のモラルサイエンスをめぐる筆者の

長年の模索の一部を要約したもの」と位置づけている。そこで以下、これまでの水野氏の研究の歩みを概観し、その上で本書の内容を紹介したい。

水野氏の最初の著作は、『モラロジーはどのような科学か』（道徳科学研究所、一九七一年）である。これは、近代の「科学主義」がなお支配的であった当時の時代状況を背景に、「道徳科学（モラロジー）」の「科学」的方法と性格を明らかにした認識論的・方法的な書物である。とはいえ同書は、「科学主義」とは無縁である。むしろそれは、「道徳科学（モラロジー）」の観点から、「科学主義」に対する批判的な見方を提起した書である。同書は、「どんなに科学主義が支配する時代においても、世界観までも、人間の内面までも科学主義化する必要はないし、また出来ない」という言葉で閉じられている。

このような問題意識は、次に刊行された『心を開く』（廣池学園出版部、一九七八年）において、より具体化されたかたちで展開されている。同書の「改訂版刊行のことば」（一九八三年）では、「元来、本書の基本的視点は、人間の疎外状況、すなわち人間性喪失に直面した現代人に、豊かな精神を回復する方向を述べたものであります。モラロジーの創建者、広池千九郎博士もそうした事態を見通していたため、その解決策を提示しようとしたのであります」と述べられている。同書は、こうした問

題意識を、具体的な日常の事例に即して敷衍したものである。

このように、一九七〇年代の水野氏の研究は、近代社会を生きる人間の方について、「道徳科学（モラロジー）」の観点から考察することを主眼としていたと見ることができるといえる。

続く一九八〇年代の水野氏の探究の成果は、一九九一年刊行の『ケアの人間学』（ゆみる出版）にまとめられることになる。一九八〇年代の日本は、時代の転換期であった。つまり、日本は、それまでの近代化路線に終わりを告げ、ヘポストモダン（脱近代）の時代へと進み始めたのである。あらゆる領域で、近代的な「成長」路線の終焉とヘポストモダンの「成熟」社会の到来が議論された。『ケアの人間学』はこのような時代の地殻変動を背景に、ヘポストモダンの「成熟」社会における人間の生き方を、「道徳科学（モラロジー）」を参照しつつ考察したアクチュアルな書であった。以後水野氏は、ヘポストモダン社会における「道徳科学（モラロジー）」の可能性と課題について取組んでいくことになる。その意味で同書は、これ以後今日に至る水野氏の探究の原点となった書物であるといえる。時代の変化の波を他に先駆けて察知し、その先端に「道徳科学（モラロジー）」をぶつけ、その結果明らかとなった可能性や問題点を大

胆に指摘し、自らその克服と新たな挑戦に踏み出していく姿勢は、水野氏の本領である。同時にそこには、前述の〈対話（ディアログス）〉の学問方法や、画然たる〈社会的責任〉意識を読み取ることができる。このような水野氏の姿勢から学ぶものは大きい。

さて、『ケアの人間学』の内容をもう少し具体的に見過ておこう。同書は、「ケア」の営みが人間・社会の諸活動の基礎にあり、これからの「成熟」社会の確立に向けて更なる重要性を増しつつあることを、多様な観点から論じている。取り上げられている論点は以下の通りである。「他者」への「ケア」、「世代間のケア」、「ボランテニア」、「ターミナル・ケア」、「アート（技）」、「パトスの知」、「総合の知」、「ホモ・パティエンス（病んで苦悩する人）」、「生と死」、「宇宙の生命原理」、「老い」。同書からは、へ生・老・病・死を貫いて営まれる「ケア」の営みが鮮明に浮かび上がってくる。そして同書ではじめて導入された「科学を超えたより開かれた総合の知」である「人間学」という学問方法は、以後の水野氏の理論と実践の基本枠組みとなる。

さて、この『ケアの人間学』を幹として、三つの著書が枝分かれする。『成熟の思想』（廣池学園出版部、一九九三年）、『弱さにふれる教育』（ゆみる出版、一九九六年）、そして『心を癒す物語 もう一つのモラロジー入門』（廣池学

園出版部、一九九七年）である。〈水野「人間学」〉の森は、こうして徐々にその広がりや深みを増していくこととなるのである。

『成熟の思想』と『弱さにふれる教育』は、『ケアの人間学』の考察を基礎に、それをさらに深化・発展させたものである。前者ではとくに、「宇宙自然に支えられている人間」の諸相について考察されている。後者ではとくに、「人間の弱さ」の問題について取り上げられている。

『心を癒す物語 もう一つのモラロジー入門』は、『ケアの人間学』以降の研究成果を土台に、廣池千九郎並びに「道徳科学（モラロジー）」に関する新たな解釈の地平を開拓した書物である。同書の「あとがき」には、次のように記されている。「当然ながら、人間の生き方は変化する。道徳の役割も内容もまた変化する。共生の時代に人類の生きる道をどう示すかということになると、困難を前にしての強い広池千九郎像や、道徳実践が生存とかかわって必死なものと意味づける視点は、後退せざるを得ないと思う。激しい競争のなかを生き残る道徳論と、共生のために積極的に他者にかかわる道徳論とは異なる。明らかに道徳論の組み替えが必要だと認識が、私の体内からごく自然に湧き起ってきた」。同書では、こうした問題意識に根ざして、廣池千九郎の生涯と「道

徳科学」の理論に流れる「ケアの心」に新たな光が当てられている。

さて、以上に簡単に辿った歩みの延長線上に、この度の『経国済民』の学、日本のモラルサイエンス研究ノート〔麗澤大学出版会、二〇〇八年三月〕が位置していることになる。以下、その内容を紹介しよう。

「序」では「モラルサイエンス」が、一八世紀に西欧で誕生した人間・社会・政治・経済のあり方を相互連関的・包括的に考察する総合的学問であり、近年の学問再編・統合の動向の中で再評価されつつあることが紹介されている。その上で、その「モラルサイエンス」の日本における代表的な継承者という観点から、廣池千九郎に新たな評価の光を当てる意義について論じている。またその廣池の試みに影響を与えた人物として、法学者・穂積陳重が紹介され、両者の関連を再考察する意義が指摘されている。このような問題意識の背景には、これまでの「道徳科学（モラロジー）」理解が、ともすれば「個人倫理」的な側面に重点化して行われてきたことへの批判意識が存在している。筆者は、「道徳科学（モラロジー）」をふたたび、人間・社会・政治・経済の諸領域を包括する「経国済民の学」として復活させようと挑戦しているのである。ちなみに同書では、「モラルサイエンス」、「公共哲学」、「経国済民の学」（「経世」）ではなく

「経国」とされているのは、戦後日本における「国家」論に対する不当軽視の傾向に対する批判意識に由来する」という用語がほぼ同義で用いられている。

さて同書は、第一章「公共世界を築き上げるもの」、第二章「公共的倫理としての「他者へのケア」、第三章「穂積陳重と廣池千九郎のモラルサイエンス」の三章構成となっている。

第一章では、「モラルサイエンス復活の意味」、「国家的公共性——愛国心の問題——」、「日本版モラルサイエンス」、「モラルサイエンスの特色」、「一九世紀の科学的（進化論的）倫理学衰退の理由」、「これからのモラルサイエンス」などの論点が扱われている。注目されるのは、「倫理の基礎は自然にあり」という現代の「自然主義的倫理」の潮流に論及しながら、廣池に見られる「自然主義的」傾向（たとえば「自然の法則に従う」という発想）を再評価している点である。この視点はたいへん斬新であり、今後の「道徳科学（モラロジー）」研究の一つの方向性を指し示しているということが出来る。なお、本誌『モラロジー研究』六二号（二〇〇八年九月）掲載の伊東俊太郎（科学史・比較文明学）「創発自己組織系としての自然」にも水野氏と同様の指摘が見られる。参照を願いたい。

本章ではまた一九世紀のアメリカの大学で、「モラル

サイエンス」が最終学年の必修科目として、カリキュラムの中心を成していたことが紹介されており、注目に値する。水野氏は、廣池の「道徳科学（モラロジー）」を建学理念（「知徳一体」）の基盤とする麗澤大学で四〇年間にわたり、「道徳科学」（一年次必修科目）という科目を担当してきた。これは文字通り廣池の「道徳科学（モラロジー）」を扱う科目である。筆者は、麗澤大学の「道徳科学（モラロジー）」教育がカリキュラムの中心として果たしうる可能性に言及していると見てよい。現在麗澤大学では、「道徳科学教育センター」を中心に、今後の「道徳科学」科目のあり方について議論されているが、水野氏の問題提起は検討に値するといえよう。

第二章は、「公共的倫理としての「他者へのケア」と題して、「他者のために生きる」、「廣池千九郎の出発点——歴史的考察と比較的方法——」、「穂積八束との関わり」、「伊勢神宮と我国体」、「他者中心の「配慮の倫理」へ」、「公共倫理としての「慈悲寛大自己反省」」、「公共世界におけるケアの倫理——「かかわり」と「つながり」——」、「つながり」としてのケア理論」などの論点を扱っている。

この章も注目に値する知見がいくつも提起されているが、廣池の「道徳科学（モラロジー）」の中心的内容である「慈悲寛大自己反省」の原理を「公共世界」の倫理

として再構成する取り組みは本書ならではの創造的な試みであるといえる。そこでは、「道徳科学（モラロジー）」の問題点と可能性が新たな相の下に浮き彫りにされ、今後の「道徳科学（モラロジー）」研究に向けて斬新な問題提起が行われている。そしてその論述には、「ケアの人間学」以降の研究の成果が惜しむことなく盛り込まれている。本書の白眉といえよう。

またこれまであまり本格的に検討されてこなかった廣池の国学者としての側面に光を当てた議論も見逃すことは出来ない。なおここでの「国学」は、「モラルサイエンス」に通じる性格を持つ学問として捉えられていることに注意したい。またこの論点は、次の第三章の考察の布石ともなっている。

さて、その第三章「穂積陳重と廣池千九郎のモラルサイエンス」では、「穂積陳重と「生成」」、「穂積陳重「法律進化論」の特色」、「廣池千九郎が穂積陳重から受けた影響」、「法律の「人類化・世界化」と人類道徳への進化」、「権利主義法学論の受容の仕方」、「稿本「法理学講義録」のこと」、「歴史法学・比較法学」といった節が立てられている。

この章の主題はただ一つ、穂積の「法律進化論」と、廣池の「道徳進化論」としての「道徳科学（モラロジー）」の共通性の解明と、前者から後者への影響関係の

跡付けである。まず第一章でも論じられた「自然主義的倫理」が、両者の「進化論」の根底にあることが指摘される。またその背景には、穂積においても、廣池においても、国学の「生成」思想からの影響が存在すること、そして、両者がそれぞれ、「法律」・「道徳」の「進化」の最高到達点として、「法律」・「道徳」の人類「共通化」の道を志向していた点が指摘されている。

このように本書は、『ケアの人間学』以降の研究成果を基礎に、「道徳科学（モラロジー）」を現代的文脈において有用な「モラルサイエンス」として再構築する上で、どのような可能性と問題点を孕んでいるのか、という問いを探究したアクチュアルな仕事であるといえる。

なお、水野氏は「あとがき」で本書を、故・永安幸正氏（道徳科学研究センター、麗澤大学、早稲田大学の各教授を歴任）が中心的に関わり刊行された『総合人間学モラロジー概論』（財団法人モラロジー研究所、二〇〇八年九月）の「姉妹編」として「位置づけてもらえれば有難い」と記している。その所以は、「あとがき」に述べられている。その文章からは、まさに「学問救世」（柳田國男）に邁進して顧みることなき二人の学者の人的魅力と学問的迫力が伝わってくる。そして「道徳科学（モラロジー）」研究への尽きることなき情熱と責任感を併せて感じ取ることができる。

水野氏の新たな問題提起にどのように向き合っていくのか、今後の「道徳科学（モラロジー）」研究の真価が問われるところである。書評者もその輪の中に積極的に加わっていきたいと念じている。